

答え合わせ・解説

問1	答え 3 唐	日本は7世紀初めから遣隋使を送り、隋が滅んだ後は唐に使節（遣唐使）を送りました。唐の優れた政治制度や文化は、当時の日本の国づくりに大きな影響を与え、国際色豊かな「天平文化」などが発展するきっかけとなりました。
問2	答え 1 正倉院	奈良県の東大寺に位置する正倉院は、聖武天皇ゆかりの品々や、当時の日本が交流していた大陸の文化を伝える貴重な宝物を収蔵しています。湿気を防ぐための高床式、特に三角形の木材を組み上げた校倉造（あぜくらづくり）という建築様式が特徴です。
問3	答え 1 租	律令制における「租」は、土地（口分田）を対象に課された税です。班田収授法によって配分された口分田の面積に基づき、収穫した稲を納めました。納められた稲は、主に地方（国府など）の財源や飢饉に備えた備蓄として利用された点が、都へ運ばれた「調」や「庸」との大きな違いです。
問4	答え 1 ① 口分田 ② 墾田永年私財法	律令制度の下では、公地公民の原則に基づき、人々に一定の農地を分け与えて税を徴収する仕組みが整えられました。このとき支給された農地が口分田です。その後、人口増加による土地不足が深刻化したため、政府は開墾を奨励するために三世一身の法を経て、743年に墾田永年私財法を出し、開墾した土地を永久に自分のものにするのを認めました。
問5	答え 1 天皇を中心とする朝廷が日本を統治する正当性や、国家の成り立ちを対内外に示すため	奈良時代は律令国家としての体制が整えられた時期であり、一国家としての歴史を公式に記録する必要がありました。『日本書紀』は、神話の時代から続く天皇の系譜を整理することで、朝廷による統治の由来を明確にし、日本の国としての成り立ちを国内外に示すことを意図して編纂されました。
問6	答え 1 仏教の力を用いて、疫病や災害などの社会不安を解消し、国家の安定を図るため	当時の社会は天然痘の大流行や凶作、貴族間の対立といった困難に直面していました。聖武天皇はこれらの社会的な混乱を解決するために仏教を重視し、国家の安泰を祈願して大仏の造立や全国的な寺院建立を行いました。これは宗教的な権威によって天皇を中心とする統治体制を強化する狙いもありました。
問7	答え 3 納める品物を準備するだけでなく、それらを自ら都まで歩いて運ばなければならなかった。	律令制下の税のうち、地方の特産物を納める「調」や、布を納める「庸」は、納税者である農民が自ら都まで運んで納める義務がありました。これを運脚（うんきゃく）と呼びます。往復の道中での食料も自分で用意しなければならず、遠方の国から都へ向かう農民にとって、この運搬作業は生活を破綻させ、行き倒れる者が出るほど過酷な負担となっていました。
問8	答え 1 鑑真	鑑真は唐の時代の高僧で、日本の仏教の秩序を整えるために必要な「戒律」を伝える目的で来日しました。当時の航海は命がけであり、何度も遭難を繰り返して視力を失いましたが、不屈の精神で来日を成功させました。平城京に唐招提寺を建立し、日本の仏教の発展に大きく貢献しました。
問9	答え 1 戸籍に基づいて6歳以上の男女に口分田が与えられ、その収穫から稲を納める「租」が課された。	律令国家は戸籍によって人民を把握し、班田収授法によって口分田を貸し与えることで、租税の基盤を整えました。口分田を与えられた農民には「租」として稲を納める義務があり、この仕組みによって国家は安定した食料供給と地方行政の運営を目指しました。他の選択肢にある土地の永年私有や租の全免除は、当時の基本原則とは異なります。